

ลมจากกรุงเทพฯ バンコクの風



JSPS
BANGKOK
NEWSLETTER
2018-19 Vol.4



Pha That Luang
タート・ルアン (ヴィエンチャン、ラオス)

JSPS BANGKOK CONTENTS

JSPS主催事業説明会の開催	01	学術情報 (2019年1月-3月)	19
バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント	05		
JSPS同窓会情報	12		
特集「教育学術分野における日タイ協力の取組と展望」	14		
在タイ日本国大使館 久芳 全晴 一等書記官			
センター活動記録	17		
コラム	18		



センター長挨拶

バンコク研究連絡センターの活動報告書「バンコクの風」の2018年度第4号（2019年1－3月分）をお届けします。ページ上部の集合写真のとおり、4月1日付けで新しい国際協力員の臼井真希さん（うすいまき 三重大学）と濱端悠祐さん（はまばたゆうすけ 東北大学）が着任しました。来年3月までの一年間の任期です。いろいろな機会に皆様とお目にかかることもあろうかと思しますので、よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

新しい元号「令和」が発表され、5月1日に徳仁殿下が天皇に即位されます。前号で退位される明仁天皇との「ユネスコ」を通しての出会いに触れましたが、新天皇ともユネスコが縁の出会いがありました。1988年夏、青少年育成国民会議（NAYD）が主催した「国際青年の村」（世界30か国から日本人も含めて300名が参加）での開会式に臨席されたのが浩宮殿下で、そのイベントの実行委員長を委嘱されていた私は、NAYDの井深大会長（ソニー創業者）と二人で、開会式から夜のレセプションまで浩宮殿下のそばにいて色々なことをお話しました。その中で特に印象に残っているのが、学習院高等科に在籍されておられた時代、担任の越田稜先生（当時の高校ユネスコクラブ活動推進の中心的存在）から、ユネスコのこと、平和、人権の大切さを学ばれたというお言葉でした。1947年に世界で最初の民間ユネスコ協会を仙台で設立された発起人のお一人である上田康一さんは、後に東宮御所の「お世話係」に就かれます。勝手な想像ですが、新天皇は幼少のころからご両親とともに上田さんを通してユネスコや平和の大切さを学ばれたのではないのでしょうか。

平成が「戦争のない時代」であったように、令和は「平和とともに生きる時代」であってほしいものです。

2019年4月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長

山下 邦明

JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

プリンスオブソンクラ大学にて JSPS 事業説明会を実施（1 月 30 日）

プリンスオブソンクラ大学（PSU）ハジャイキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。PSU は 1967 年設立のタイ南部初の国立大学で、5 つのキャンパスを持っていますが、今回訪れたハジャイがメインキャンパスとなります。

本説明会は PSU で行われた在タイ日本大使館主催の日本留学説明会と日程を合わせての開催となったため、午前中に大使館職員、説明会参加大学と PSU の Dr. Niwat Keawpraudub 学長を表敬訪問しました。



午後から行われた JSPS 事業説明会では、冒頭で Assoc. Prof. Dr. Teerapol Srichana (Director, Research and Development Office, PSU) に歓迎の挨拶をいただき、その後富山副センター長から JSPS の概要や同窓会組織、新原・簗輪両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。

後半では JSPS 論博事業により千葉大学大学院園芸学科で博士号を取得されている Dr. Sompong Te-chato (Department of Plant Science, Faculty of Natural Resources, PSU) に現在宮崎大学との間で行われている共同研究についてお話をいただきました。



Dr. Sompong は元日本政府国費外国人留学生でもあり、修士課程も千葉大学の同学科を修了されています。現在も様々な日本の大学と交流をもたれているということでした。

今回の説明会は約 15 名の方々に参加いただき、タイ南部での貴重な広報の機会となりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/01/30/7136/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

コンケン大学で JSPS-JST 合同事業説明会を実施（2月4日）

タイ東北部のコンケン大学で JSPS と科学技術振興機構（JST）の合同事業説明会を実施しました。コンケン大学は 1964 年に設立された東北部初の国立大学で、日本の大学では筑波大学等が事務所を設けています。

この事業説明会は 1 月 30 日のプリンスオブソンクラー大学に引き続き、在タイ日本大使館主催の日本留学説明会と日程を合わせて開催したものです。事業説明会の前にはコンケン大学副学長（国際担当）の Assoc. Prof. Dr. Nawarat Wara-aswapati Charoen を表敬訪問しました。

その後、留学説明会と並行して行われた JSPS-JST の事業説明会には約 30 名の研究者や学生にご参加いただきました。冒頭で学長補佐（国際担当）の Assist. Prof. Dr. Archarawan Topark-Ngarm にご挨拶をいただき、続いて JSPS の事業説明を行いました。

今回はコンケン大学で勤務されている JSPS タイ同窓会員の中から Dr. Waraporn Putalun (Faculty of Pharmaceutical Sciences)、Dr. Sukanya Aimimtham (Faculty of Humanities and Social Sciences) のお二人をお招きし、それぞれ二国間交流事業と論博事業のご経験についてお話をいただきました。Dr. Waraporn はタイ学術研究会議（NRCT）と JSPS 間の覚書に基づく九州大学との共同研究、Dr. Sukanya は駒沢大学で博士号を取得された経験をお持ちです。最後に、JST の小林義英 e-ASIA スペシャルコーディネーターから e-ASIA 共同研究プログラム、SATREPS、さくらサイエンスプラン等の国際事業の説明を行いました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/04/7368/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

ナレスワン大学で JSPS-JST 合同事業説明会を実施 (2 月 13 日)

タイ北部ピッサヌローク県にあるナレスワン大学で JSPS と科学技術振興機構 (JST) の合同事業説明会を実施しました。ナレスワン大学は、日本でも各所で報道されたとおり、秋篠宮殿下が昨年 12 月に鶏に関する展示会等のご視察のため訪問されている大学です。

今回の事業説明会も前回のコンケン大学同様、在タイ日本大使館主催の日本留学説明会と並行して開催し、JSPS・JST 両機関のタイ人研究者向け事業の説明を行ったものです。

ナレスワン大学副学長への表敬訪問の後行った説明会では、当センターの富山副センター長、新原・簗輪両国際協力員から JSPS の概要および国際事業についてプレゼンを行いました。その後、JSPS タイ同窓会の Dr. Ratchanee Mukhjan (Department of Economics, Faculty of Business, Economics, and Communications) から、御自身の論博事業での経験をタイ語でお話いただきました。Dr. Ratchanee は 2014 年に愛知大学で博士号を取得されており、今年度は同窓会の理事も務めておられます。

JST については、同機構シンガポール事務所の小林義英 e-ASIA スペシャルコーディネーターが e-ASIA 共同研究プログラム、SATREPS、さくらサイエンスプラン等の国際事業の説明を行いました。

学生・研究者合わせて約 20 名の方にご参加いただき、有意義な情報提供の場となりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/13/7394/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

シラパコーン大学にて JSPS 事業説明会を開催（2 月 18 日）

2019 年 2 月 18 日（月）、シラパコーン大学サナムチャン宮殿キャンパス（ナコンパトム県）で JSPS 事業説明会を実施しました。1943 年設立の同大学は美術学校が前身であり、現在も絵画・彫刻・グラフィックアート学部（Faculty of Painting Sculpture and Graphic Arts）や音楽学部（Faculty of Music）といった珍しい学部を持ち、芸術分野でタイ最高峰とされている大学です。

この事業説明会は昨年 12 月に UNESCAP 主催のワークショップに出席した際に山下センター長がシラパコーン大学学長補佐（研究担当）の Dr. Nantanit Wanichacheva と知り合い、JSPS 事業の学内広報のご希望があったため実施したものです。

約 50 名の方にご参加いただいた説明会は、山下センター長から JSPS の概要、海外センターの役割、同窓会組織等について紹介した後、新原国際協力員が外国人研究者招へい事業、論博事業、二国間交流事業、研究拠点形成事業について説明しました。

後半には、2013-2015 年に農研機構で外国人特別研究員として研究をされた Dr. Alisa Kongjaimun (Faculty of Animal Sciences and Agricultural Technology) から改めて同事業の申請方法や日本での経験についてタイ語でご説明いただきました。

説明会終了後、副学長にお会いする時間をいただき、Dr. Pornsak Sriamornsak (Vice President for Academic Affairs and Reserach) と Mr. Panjapol Laopoonpat (Vice President for Administrative Affairs) に表敬訪問を行いました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/18/7423/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、タイ国内外で実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

カセサート大学創立 76 周年記念学長フォーラムに出席（2 月 1 日）

カセサート大学で同校の 76 周年記念学長フォーラムが開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、新原・簗輪両国際協力員が出席しました。

このイベントはカセサート大学と交流のある世界各国の大学代表者を招待し開催されているもので、昨年も当センターは参加しています。今年も日本から多数の大学教職員が参加していました。今回はメインのテーマを “Universities as Hubs for AI Research and Development” とし、以下のとおり基調講演およびパネルディスカッションが行われました。



===

基調講演①

“How AI is Changing Higher Education?”

Mr. Brad Birt (Director, Learning Partnerships, Curtin University, Australia)

基調講演②

“How AI can Make Smart Cities and Promote Development in Farming”

Dr. Chai Wutiwiwatchai (Director, National Electronics and Computer Technology Center (NECTEC), Thailand)

パネルディスカッション①

テーマ: Universities' Choices for AI Education

飯田 元教授（奈良先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科）

明石 良教授・副学長（宮崎大学農学部）

Dr. To-Hai Liou (Vice President National Chengchi University, Taiwan)

Dr. Putchong Uthayopas (Vice President, Kasetsart University)

Dr. Watsatree Diteeyont (Faculty of Education, Kasetsart University)



パネルディスカッション②

テーマ: University-Industry Collaboration to Create AI Research and Development Hubs

Dr. Putchong Uthayopas (Vice President, Kasetsart University)

Dr. Sutkhet Nakasathien (Dean, Faculty of Agriculture, Kasetsart University)

Dr. You-Jin Park (National Taipei University of Technology, Taiwan)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

Dr. Virach Sornlertlamvanich (International Institute of Technology (SIIT), Thammasat University)

Dr. Nguyen Viet Long (Deputy Director, International Cooperation Office, Vietnam National University of Agriculture, Vietnam)

===

このフォーラムを通じて、高等教育が人工知能（AI）とどのように向き合っていくべきか、AIを活用した都市開発等について議論が行われました。2月21日開催のNRCT-JSPA-JAATセミナーでも「スマートシティ」といった都市開発に関わるトピックを取り上げる予定のため、当センターとして大変参考になるイベントでした。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/01/7351/>)

NRCT-JSPS-JAAT 共催セミナーを開催（2月21日）

2019年2月21日（木）、Arnoma Grand Bangkok でNRCT-JSPS-JAAT 共催セミナー “Sustainable Development Goals in Thailand and Japan -Smart City and Urban Development-” を開催しました。このセミナーはタイ学術研究会議（NRCT）、JSPS タイ同窓会（JAAT）、そして JSPS バンコク研究連絡センターが毎年2月に協力して開催しているものです。今年はメインテーマを「日タイにおけるSDGs（持続可能な開発目標）」とし、特に「都市開発」に焦点をあてたセミナーとなりました。

冒頭では以下3名に開会の挨拶をいただきました。

1. Prof. Emeritus Dr. Soottiporn Chittmitrapap (Chairman, Research Council of Thailand Executive Board)
2. 山口英幸氏（日本学術振興会国際事業部人物交流課長）
3. Dr. Danai Tiwawech (President, JSPS Alumni Association of Thailand)



Prof. Emeritus Dr. Soottiporn

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント



山口人物交流課長 (JSPS 本部)



Dr. Danai (FY2018-JAAT 会長)

その後、基調講演者の野田真里准教授（茨城大学人文社会科学部）に “Japan and SDGs for international and local development” と題して日本の SDGs の各目標に対する現状やタイとの関連等についてお話をいただきました。



野田真里准教授（茨城大学人文社会科学部）

続けて行われたパネルディスカッションでは、「Smart City」を実現するためのタイの都市開発について、バンコクやコンケンの事例を交えて3名の方にご講演をいただきました。

（プログラムに記載のあった Dr. Monsak Socharoentum (Director of IoT and Digital Innovation Institute, Digital Economy Promotion Agency (DEPA))は当日急用のため欠席。）

1. Dr. Katan yoo Klubsuwan (President, Smart Cities Thailand Association)
2. Dr. Pornsan Vichianpradit (Lecturer, Faculty of Architecture, Chulalongkorn University)
3. Mr. Kungwan Laovirojjanakul (Co-Founder, Khon Kaen City Development (KKTT) Co. LTD.)

このセミナーには約70名の方々にご出席いただき、各講演の後には質問も多く挙がりました。基調講演とパネルディスカッションをとおして、SDGs や都市開発に対する関心を高めることができたと考えています。

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/21/7475/>)

京都大学「Mahidol 環境学教育・研究拠点」開設記念シンポジウムに出席（3月8日）

マヒドン大学サラヤキャンパスで「Mahidol 環境学教育・研究拠点」開設記念シンポジウムが開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、新原国際協力員が出席しました。

この研究拠点は京都大学が「指定国立大学法人」として取り組んでいる On-site Laboratory（海外の大学との協働による現地運営型研究室）の一つで、京都大学地球環境学堂とマヒドン大学の環境学分野における共同研究拠点となることが期待されています。



マヒドン大学学長代理（Acting President）の Prof. Banchong Mahaisavariya への表敬訪問には当センタースタッフも同行させていただきました。

シンポジウム午前の部では、山下センター長が日本とタイの学術交流について、JSPS 国際事業の紹介も交えながら講演を行いました。



午前の部終了後にはマヒドン大学工学部内の研究室ツアーもあり、充実した環境の中で今後京都大学との交流が发展していくことが伺えました。

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/03/08/7552/>)

第 18 回在タイ大学連絡会 (JUNThai) に出席 (3 月 11 日)

在タイ日本国大使館で第 18 回在タイ大学連絡会 (Japanese Universities' Network in Thailand: JUNThai) が開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、簗輪国際協力員、新原国際協力員の 4 名がオブザーバーとして出席しました。

第 1 部の講演会では、以下 3 件の講演が行われました。

● 「九州大学の国際戦略」

新原卓氏 (JSPS バンコク研究連絡センター国際協力員 (九州大学))
(写真右)



● “The Irony of the Thai Middle Class in Democratic Transition and Consolidation”

Dr. Kanokrat Lertchoosakul (Lecturer, Department of Government, Chulalongkorn University) (写真右)



バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

●「数字で見るタイの教育事情 -基礎教育段階を中心に-」

安宅理恵氏（東京農工大学）（写真右）



第2部の連絡会では、直前に開催されたワーキンググループを代表して、京都大学 ASEAN 拠点の柴山所長から以下の報告がありました。

・前回決定された在タイ大学連絡会の情報公開について、連絡会の概要および参加校が閲覧できるページが JSPS バンコク研究連絡センターのウェブサイト「タイにおける日本の大学」上で公開済みである。

・前回議論された「常任幹事（任期 2-3 年、仮称）」の設置について、ワーキンググループ内で京都大学 ASEAN 拠点にお願いしたいとの意見があった。大学本部に確認が必要なため、可否の回答期限は次回の連絡会（6 月）までとさせていただきたい。その間、常任幹事を務めたいという大学が出てきた場合にはその大学にお願いをしたい。

その他、今回の連絡会をもって幹事校の任期（1 年）が終了となった大分大学と東洋大学に代わり、新たに横浜国立大学と上智大学が幹事校となることが確認されました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jps-th.org/2019/03/11/7563/>）

ASEAN University Network (AUN), SUN/SixERS 主催アカデミックセミナー” Study in JAPAN” に出席（3 月 18 日）

チュラロンコン大学で、ASEAN University Network (AUN) と国立六大学国際連携機構（SUN/SixERS）によるアカデミックセミナー” Study in Japan” が開催され、榎輪国際協力員が出席しました。

このセミナーは、SUN/SixERS が協働して海外でアカデミックセミナーを実施するために「スーパーグローバル大学創成支援事業」の追加交付を岡山大学が申請し、採択されたことをきっかけとして実施され、主に大学院生を含む研究者に対して SUN/SixERS に加盟する大学の研究の紹介や、日本での研究生生活を送るための情報提供を行うことを目的としています。このイベントでは三名の日本留学経験者（写真右）による留学経験談の発表や、二名の日本人研究者による研究紹介プレゼンテーションが行われ、日タイ双方の参加者たちは熱心に耳を傾けていました。講演者と講演タイトルは以下の通りです。



バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

講演者：岡山大学 医歯薬学総合研究科 竹居 孝二 教授（写真左下）

講演タイトル：Cell Shape: When cell changes its shape, whats going on inside?

講演者：金沢大学 人間社会研究域人間科学系 西本 陽一 教授（写真右下）

講演タイトル：Study of Intangible Cultural Heritages: Case of Aenokoto Ritual in Japan



また、会場には SUN/SixERS の各大学と、国際交流基金や日本学生支援機構がブースを構え、日本留学に関する学生からの質問や相談に応じていました。

本セミナーでは日本での研究生活に対する、タイの研究者や学生の関心の高さを伺うことができました。今後 ASEAN 諸国や中国などでも同様のセミナー実施が検討されているとのことで、SUN/SixERS の国際的な活動の展開が期待されます。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/03/18/7596/>)

同窓会活動報告

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール・インドネシア JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナム・マレーシアでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2018 年度第 5 回 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会・年次総会、論博メダル授与式を開催 (2 月 21 日)

Arnoma Grand Bangkok で 2018 年度第 5 回 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会・年次総会、論博メダル授与式および BRIDGE フェローシップ報告会を開催しました。

このイベントは毎年 2 月の NRCT-JSPS-JAAT 共催セミナーに日程を合わせて開催しているものです。今年度第 5 回の JAAT 理事会はセミナー直前に行われ、午後の JAAT 年次総会の事前打ち合わせ等を行いました。今回は JSPS 本部から出張中の山口人物交流課長、中園係員、濱端国際協力員もオブザーバー参加しました。

午後から開催された JAAT 年次総会は、年に一度理事会役員だけでなく全ての JAAT 会員に出席を呼びかけているもので、約 30 名の方が出席しました。今年度末で Danai 会長をはじめ理事会役員全 15 名の任期が終了するため、新しい役員を選任を行いました。



新しい JAAT 理事会メンバー

新会長には、今年度副会長を務めていた Dr. Porphant Ouyyanont (Professor, School of Economics, Sukhothai Thammathirat Open University) が選ばれました。その他、今回の理事会役員の再編により、15 名のうち 12 名が今年度から継続、3 名が新規役員となりました。

JAAT 年次総会終了後、2017 年度に外国人研究者再招へい事業 (BRIDGE) により東京大学で研究を行った Dr. Kampanart Silva (Senior Nuclear Scientist, Thailand Institute of Nuclear Technology) が研究報告を行いました。Dr. Kampanart は高校から日本に留学され、学士課程・修士課程を東京大学で修了されました。タイに帰国後、JSPS 論博事業を活用し、2015 年度に東京大学で博士号を取得されています。

この日の最後に行われた論博メダル授与式では、昨年度日本の大学で論文博士号を取得された 2 名から、日本で行った研究についてご紹介いただきました。

1. Dr. Rungtiwa Srisuwantha (Srinakharinwirot University) 【東京医科歯科大学】
“Porphyromonas gingivalis Elevated High-Mobility Group Box 1 Levels after Myocardial Infarction in Mice”
2. Dr. Petcharat Werukamkul (Rajamangala University of Technology Phra Nakhon) 【大阪市立大学】
“Taxonomic studies of Podostemaceae in the Phetchabun Mountain Range, Thailand”

2 名のプレゼン終了後、毎年 JSPS 論博事業修了者にお渡ししている記念メダルを山口課長から、JSPS 同窓会バッジを JAAT 新会長の Dr. Porphant から贈呈しました。

同窓会活動報告

JSPS バンコク研究連絡センターは JAAT 年次総会や論博メダル授与式といった機会に同窓会員が直接顔を合わせ、会員同士のネットワークが強まることを期待しています。今後もこうしたイベントを大切にしていきたいと思います。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/02/21/7477/>)

JSPS タイ同窓会 (JAAT) 外国人研究者再招へい事業 (BRIDGE) 選考委員会を開催 (3 月 4 日)

JSPS バンコク研究連絡センターで平成 31 年度外国人研究者再招へい事業 (BRIDGE フェローシップ) の選考委員会を開催しました。

同事業は JSPS 同窓会の正規会員が対象となっており、採用者は平成 31 年度に最長 30 日間日本の大学等で研究を行うことができ、当会が往復航空券や滞在費を支給します。各国の JSPS 同窓会が選考委員会を組織し候補者の選考を行い、JSPS 本部に推薦を行う形をとっています。

タイ同窓会 (JAAT) における選考委員会に出席した委員は以下のとおりです。

- Dr. Paritud Bhandhubanyong (選考委員長・JAAT 会員)
- Dr. Kittisak Sawanyawisuth (JAAT 理事)
- Dr. Suratwadee Jiwajinda (JAAT 理事)
- Dr. Sukanya Aimimtham (JAAT 理事)
- 山下邦明センター長

今年は 6 名から申請書の提出があり、選考委員会での議論の結果、3 名を JSPS 本部へ推薦することとなりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/03/04/7516/>)

今回の特集では、在タイ日本国大使館の久芳全晴一等書記官に、「教育学術分野における日タイ協力の取組と展望」と題して、ご寄稿いただきました。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

教育学術分野における日タイ協力の取組と展望

在タイ日本国大使館一等書記官 久芳 全晴

1. はじめに

本年 2019 年のタイでは、5 月に国王陛下の戴冠式が予定されており、また、ASEAN 議長国をタイが務めることになっている年です。日本においても、先日、新しい年号となる「令和」が発表されましたが、天皇陛下の譲位が予定されております。両国において動きの激しい一年になることが予想されます。

両国の良好な関係は年々深まっています。一例を挙げますと、昨年、日本を訪問したタイ人の数が 113 万人となり、初めて 100 万人を突破しました。今年も昨年を上回るペースで訪日タイ人数が伸びていると伺っています。教育学術分野における両国の協力・交流関係も引き続き拡大をしており、現在タイには約 50 の日本の大学がオフィスを構え、「在タイ大学連絡会（Japanese Universities Network in Thailand : JUN-Thai）」を組織し、相互に連携協力しています。初等中等教育段階においても、タイの学校と姉妹校提携を結んでいる日本の学校は、小学校 2 校、中学校 10 校、高等学校 33 校（2016 年）となっています。

本稿では、これまで順調に発展してきた日タイの教育学術分野において、新たな動きである、タイにおける日本型高等専門学校の設立、そして留学生交流の動向について私見も含め触れていきたいと思っています。

2. タイにおける日本型高等専門学校の設立

タイは 1 人当たり GDP が 6,700 ドル程度となっている一方で、近い将来、少子化による労働力人口の減少が見込まれています。このまま低付加価値の労働集約産業に頼った成長を続けた場合、いわゆる「中所得国の罠」に陥るおそれが指摘されています。

タイ政府は、更なる経済発展を目指すべく、「Thailand 4.0」という国家戦略を掲げ、産業の高度化・高付加価値化等の課題に注力していますが、高付加価値産業の育成に当たっては、人材育成、研究開発への投資が不可欠になります。

日本からタイへの人材育成への協力について、タイ政府は当初、職業教育の改革の観点から、テクニカル・カレッジ（日本の高校相当の 3 年の課程と、それに続く 2 年の課程を持つ職業学校）を充実・発展させるべく、日本の国立高等専門学校機構のサポートを受けることとし、2018 年 5 月よりチョンブリとスラナリの 2 つのテクニカル・カレッジにおいて取組をスタートさせました。それと前後する同年

4 月、ティラキアット教育大臣が来日し、高等専門学校を視察され、その翌月には、2019 年 5 月までに、既存校へのサポートというレベルにとどまらない、新規の日本型高等専門学校をタイに設立することを目指すと表明されました。50 年以上にわたり、我が国の産業の発展を担う優れたエンジニアを育成し続け、「ものづくり日本」、「技術立国日本」を支えてきた高専の経験が高く評価され、今後のタイの発展を後押しすることになったと言えます。

日本型高等専門学校は、まず 1 校目がキングモンクット王工科大学ラカバン校の附属校（経営は独立）として同校の敷地に 2019 年 5 月に開校し、メカトロニクス・コース 24 名からスタートすることになっています（その後、順次コースを追加）。また、2 校目が 2020 年 5 月にキングモンクット工科大学トンプリ校の附属校（同様に経営は独立）として同校の敷地に開校する予定です。施設・設備等のハード面整備についてはタイ政府予算で、カリキュラム策定・実施等のソフト面のサポートは円借款で賄われる予定となっており、日本の高専教員も派遣されることになっています。また、日本語の授業については国際交流基金の日本語教育専門家がカリキュラム設計等を支援することになっています。



文部科学省・タイ教育省における産業人材育成に関する協力覚書締結式



タイにおける日本型高等専門学校の教室（予定）

3. 留学生交流の動向

留学生交流の詳細な動向については、日本学生支援機構が専門的見地から把握されていますので、そちらに譲り、ここでは日本政府奨学金の選考及び地方留学説明会等を通じて感じた当方の私見を述べたいと思います。

タイから日本に渡る留学生数は3,962人（2018年）であり、そのトレンドは非常に緩やかな増加（横ばい）となっています。訪日タイ人数に比べると大きな数とは言い難いところではありますが、タイ人学生の志向（進路決定に非常に大きな影響を持つ保護者の志向）として、英語に習熟できるかという点が留学先の選考において大きな要素となっており、日本の大学において英語のみで学べるコースの少ないことを踏まえると、健闘している結果とも言えるかもしれません。

実際、日本政府奨学金の選考に申し込んでくる学生に日本を選ぶ理由を尋ねると「一度、住んでみたい憧れの国だから」「安全な国だから」「理工系を中心に先進的な国だから」「日本文化（アニメ・漫画等）が好きで日本語を勉強してきたから」と回答する学生が多く、日本という国について基本的にポジティブなイメージを持ち、その上で自分の専攻分野をより研究できるという考えから日本を選択している印象を受けます。

一方で、先日訪問したタイの大学では「もっと日本の学生にタイへ留学してきてほしい」という発言も出ており、少子化・国際化の影響により、大学という組織という単位においては潮目が少しずつ変わり始めているのではという印象も受けています。バンコクを中心に質の高い学生が多いことから、引き続き、タイにおける留学生獲得の流れは続いていくと思いますが、中長期的に見ると、研究連携を前提とした留学生交流が中心になっていく可能性があるのではないかと感じています。

なお、タイ人の留学生の専攻区分は、学部段階においては、社会科学：40.4%、人文科学 23.2%、工学が 11.6%、大学院段階では、工学：42.7%、社会科学：14.0%、農学：11.3%となっています（2018年度）。

4. おわりに

以上、タイにおける日本型高等専門学校の設立の動きや留学生交流の動向について、私見も挟みつつ、記載させていただきました。紙面の関係から、説明し切れていない部分も多くありますし、その他の課題も多くありますが、ご容赦いただけたらと思います。

タイに赴任して、1年が経ちましたが、当初驚かされたタイ人の考え方や仕事の進め方が、彼らの長い歴史や社会の在り方に照らすと、とても合理的な選択をしていることに気づくとともに、日本人の考え方や仕事の進め方の良さ、そして今後、改善・発展させていくべき点がより客観的に見えてきた気がします。かつては、先進国である日本がタイに支援するという意識や構図があったと思いますが、タイの経済発展を経た現在、両国が更に良い関係を築いていくためには、各関係者がイコールパートナーの意識を持つことが重要であり、そのことが我が国の発展にも繋がると信じております。先人達が築き上げてきた素晴らしい友好関係が更に発展していくことを心から祈っております。

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの2019年1月から3月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

1月

- 11日 関西大学 西澤教授の来訪
- 15日 九州大学病院国際医療部一行の来訪
- 21日 大分大学医学部 内田智久助教の来訪
- 24日 千葉大学一行の来訪
- 25日 立命館大学博士後期課程 Nguyen Quynh Hounng さんの来訪
- 28日 東京工業大学 鈴木国際部長の来訪

2月

- 7日 Social Compass およびシャンティ国際ボランティア会一行の来訪
- 12日 上智大学 サリ・アガスティン理事らの来訪
- 22日 JSPS 本部 山口人物交流課長らの来訪
- 25日 名古屋大学学生一行の来訪
- 27日 東京農工大学農学部 白木准教授の来訪
- 28日 JST 金子恵美 国際部調査役の来訪

3月

- 4日 首都大学東京国際課 黒田主任、阿部主事の来訪
拓殖大学 染谷国際課長の来訪
- 5日 九州大学病院および大学院医学研究院一行の来訪
- 7日 高専機構一行の来訪
- 13日 明治大学理工学部 田中友章専任教授の来訪
- 14日 九州工業大学 学生一行の来訪
- 18日 東京経済大学 中川純教授の来訪
- 22日 東京大学大学院理学系研究科 坂本良太助教の来訪
- 29日 東亜大学 平松隆円准教授の来訪

簗輪国際協力員のバンコクつれづれなるままに

急速な経済発展を遂げるタイですが、その中でもバンコクの発展は目を見張るものがあります。ここ数年で新しいショッピングモールが次々とオープンし、BTS（バンコク鉄道システム）はどんどん延伸し、ますます便利で楽しい都市に変貌を遂げています。

最近では、日本のカラオケチェーン「まねき猫」やディスカウント大手の「ドン・キホーテ」がオープンし、日本人だけでなくタイ人からも人気を集めています。リエゾンオフィサーの Bom さん曰く、タイ人はドン・キホーテが大好きとのこと。

経済発展に伴い、林立するきらびやかなショッピングモールでショッピングを楽しみ、日本食チェーン大戸屋で日本食に親しみ、日本にしばしば旅行に行くというタイ人も増えています。

日本政府観光局（JINTO）によれば、2013 年からタイ人観光客のビザが免除されたこともあり、2018 年 1 月～11 月までの訪日タイ人旅行者数は 100 万人を突破したそうです。私の周りにも日本人アーティストのライブに行くため年に 5 回～6 回のペースで日本各地を旅行している方がいるのですが、もはや彼女の方が私よりも日本を知っているんじゃないかという気すらしてきます（笑）。

一方、発展するバンコクの対極にあるのがスラムの存在です。

タイは成長著しく生活がどんどん豊かになったように錯覚しがちですが、大多数の一般の人の生活はまだまだ厳しいことを肌で感じます。特に出張で地方に行くと、バンコクとは別の国ではないかと思われるような光景が広がっていることもしばしばです。また、観光客向けのリッチなお土産物屋や高級 Spa の前にタイ庶民の台所である屋台が普通に出ているのも、タイならではの光景です。

そのため、地方から仕事を求めて多くの人々がバンコクを目指します。しかし、たいいていの仕事は日雇い労働や肉体労働などでとても良い収入は望めません。そのため、沢山の人が合法ではないスラムに生活することになります。

私はバンコク滞在中にバンコク最大のスラムであるクロントゥーイスラムを見学する機会に恵まれました。きらびやかなリッチアジアしか見て来なかった私にとって、生ごみの膾えた匂いが充満し、下水もまともに処理されず、ボロボロの家が立ち並ぶ空間は本当に衝撃的でした。合法的に住んでいる訳ではないので、スラムはインフラの整備や出生登録もきちんと行われていません。医療を受けたり、学校に通うこともままならない状態です。

豊かで愉快的なバンコクを享受していた私にとっては、どこか心境に変化が生じてきました。

バンコクで安くて便利で楽しいサービスを提供している人々の中にスラムで生活する人がたくさんいます。バイクタクシーや屋台など、安くて便利で魅力的なものは我々には想像もつかないような貧困生活を送る人々が支えている現実が存在することを改めて認識することが出来ました。

とはいえ、人々は闊達で穏やかでそしてにっこりと自然に微笑みます。微笑みの国とは言いつつも、案外普段はむすっとしている人も多いのですが、目が合うとにっこり自然に微笑みます。

その姿からは、いつ抜け出せるとも知れない貧困状態であるにも関わらず、どこか前向きなパワーを放っているように感じます。

JSPS バンコク研究連絡センターでの仕事は、まさに発展するタイの豊かさを享受できる恵まれたごく一部の人間を対象にしたものかもしれません。スラム見学に誘っていただくことがなければ、安くて楽しいバンコク以上に視野が広がることもなかったと思いますし、なにより自分の置かれた環境の中である種の前向きさを持って生きていくタイの人々の闊達さに気づくこともなかったでしょう。

最後にこのような貴重な機会を与えて下さった、山下 JSPS バンコクセンター長にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

（記事 国際協力員 簗輪 知佳）

■技術変革促進に向けた産業界の至急の課題

KPMG International の新たな研究によれば、大多数の企業が現在の方向性を続けるならば失敗することになり第四次産業革命 (Industry 4.0 もしくは i4.0) は抜本的な変革が求められる。

昨日 KPMG は企業に対し、市場の既存の常識を覆す新規参入者に対する競争力が弱いと警告した。同時に今日の市場における製造業の現実に対応するために、CEO にトップダウン戦略と大規模な改革の実施を求めている。

企業のほとんどは今日の革新的な i4.0 の道具と技術の中で全体的に成長していて、内部完結している一つまり私たちの i4.0 の成熟の最も高度なレベルに達していない。

ただし、多くの企業はコスト削減のため投資を行っており、依然として i4.0 の成熟の始まりの段階にある。

デジタル革命は効率的というだけにとどまらず、新しいビジネスモデルを構築できない製造業者は近い将来生存の危機に立たされると、研究は結んでいる。

“A Reality Check for Today's C-suite on Industry 4.0 - Experimentation is Ending” というタイトルの新しい研究成果によると、KPMG は多くの製造業のトップレベルに安全性に関して誤った認識があることを突き止めた。組織は施設の変革から、変革に向けたボトムアップアプローチをする単一プロジェクト、ビッグデータの世代間統合、費用対効果を高めることを i4.0 への転換の証拠として挙げた。

企業は彼らのボトムラインを短期的に上げることが期待している。

しかし製造業界の恐るべきスピード変革にあわせて企業が彼らの方針を修正する必要がある場合は、各企業のイニシアチブにたよることは、より長い期間で見ればコストが増え利益が減ることを KPMG は発見した。

タイの KPMG の産業マーケット部門の部門長である、Tidarat Chimluang 氏は、この国の多くの企業は変化の速さと、i4.0 に対応していくための必要な技術適応をするためにもがいており、こ

の傾向は農業や食品生産産業のようなタイの主要産業において特に強いとしている。

タイ商工会議所大学によってなされた研究では、産業界の 3 パーセント以下の小企業と 5 パーセント以下の中企業が、デジタル化社会に注目するタイランド 4.0 時代の一角を担っている。

政府のタイランド 4.0 政策が産業界を良い方向に後押しすることを願っている、重要なのは企業が将来に向けた準備が必要であることを悟らなければならないということだ。

彼らの会社に最も適した大局的な戦略を描き、変化に俊敏に対応して行けるように会社を変革しなければならない。

KPMG は、競争に勝ち、既存の常識を覆すため、各企業は将来彼らにどのようなニーズがあるか明確にして行かなければならない。と示唆している。

Tidarat 氏は以下のように述べた。

そのことを念頭に置いて、彼らは詳細なプランに基づく戦略を練りあげ、全体的な変革をサポートする文化を作るべきである。そのような基盤を持つ組織は私達が工業生産業界で今日目にする変革を主導している。生産者が 2020 年までに i4.0 の流れにうまく乗ることが出来なければ、新規参入者と互角の戦いをしていくのは困難になるだろう。

彼らは、この取り組みを終わらせる必要はない、しかし彼らは戦略的なアプローチ、総合的な計画の立案、そして変革を促す文化形成など適切な基盤を作らねばならない。

(2019 年 1 月 4 日 The NATION 紙)

■4 月の発足に向け準備を開始—高等教育省

4 月後半までに高等教育・研究イノベーション省 (Ministry of Higher Education, Research and Innovation) が発足する見込みだ。今週、教育副大臣の Udom Kachintorn 氏は、設置法案が既に国民立法議会 (National Legislative Assembly) での初の審議に入っており、議会が 45 日以内に法案を承認するとしうえで次のように述べた。

「法案の承認後は、60 日以内に国王による承認を得ることになる。科学技術省 (Ministry of Science and Technology) 及び高等教育局 (Ohec) は新省の中で対等な役割を担うことになり、高等教育・研究革新省はこの二つの組織が統合されたものとなる。新しい大臣には科学と高等教育の双方を理解し、高等教育と研究そしてイノベーションの発展に尽力することを望む。」

一方で、新省の発足には懸念も生じている。社会科学系に強みを持つラチャパット大学群 (rajabhat universities) の関係者たちは、政府の今後の社会科学系分野への対応について不安を感じている。

自らも研究者でありチュラロンコン大学の臨床ウイルス学卓越研究センター (Centre of Excellence in Clinical Virology) のセンター長である Yong Poovorawan 教授は、科学技術省と高等教育局の統合は問題を引き起こす可能性があるとしてフェイスブックに投稿して次のように述べた。

「高等教育・研究革新省の設置は、成果を挙げている教育機関に悪影響を及ぼすだろう。タイにある 100 を超える大学の大半は研究大学ではないからだ。」

同教授は新省の成り行きを注意深く見守るよう促したうえで、更に以下の見解も示している。

「科学省 (Science Ministry) には、1979 年の発足から 20 年以内に世界的な科学者を輩出するという目標があったにもかかわらず期待外れに終わった。今回の高等教育局と科学技術省の統合により同じような失敗が再度起こる可能性は高いだろう。」

(2019 年 1 月 10 日 The Nation 紙)

■専門学校の教員採用条件の緩和

教育省は、専門資格を保持していない技術者が専門学校 (vocational school) の教員となることを認める。教育大臣の Dr Teerakiat Jareonsettasin は、「教師の日 (Teacher's Day)」を記念しての式典の際に、政府は教員を常に尊重していると表明した。

この専門資格の要件をなくす決定により、職業教育局 (Office of the Vocational Education Commission) が設定した厳格な必須要件が緩和されることになる。

現行の規則の下では、溶接、建設、機械などの分野における技術教育者を希望する応募者が専門学校で教鞭をとるためには、各分野における専門資格が必須である。

専門資格を保持しないものの実践的なスキルを保持する有望な応募者たちにとって、この要件は障壁であるとみなされていた。

Dr Teerakiat は以下のように述べた。

「この決定により各分野における実践的な経験を持つ専門家を教員として採用することができるようになるので、私立の専門学校はこの計画を歓迎している。

一方で、専門資格基準委員会 (professional standards commission) は、教育の質保証のために、教員への応募者が持つ経験に関しては最低限の基準を設けることを検討している。

我々は、新学期が始まる前に、より多くの教員への応募者が集まることを期待している。」

(2019 年 1 月 17 日 Bangkok Post 紙)

■マヒドン大学は ASEAN トップ大学を目指す

マヒドン大学はその教育水準が ASEAN University Network-Quality Assurance (AUN-QA) の求めるレベルに達しているとし、それにより国際的に著名な教育機関としてマヒドン大学の地位を確立することを目指しているという。

AUN-QA は、AUN 加盟大学によって任命された教育の質に関する責任者 (Chief Quality Officers: CQO) の集まりで、各大学に教育の質保証システムの構築を推進するガイドラインを提供し、AUN加盟大学全体の教育水準向上に取り組んでいる。

AUN-QA の教育の質評価規格は 11 の基準で構成されており、その範囲は大学の教育に対する戦略から学生の評価・質まで多岐に渡る。

現在、AUN-QA には 30 を超える加盟大学に加え、ASEAN10 ケ国から 74 の非公式加盟校が参加している。

マヒドン大学は、AUN-QA が設置されてから 5 年後の 2000 年にタイで初めて AUN-QA の教育の質評価規格を採用した。

マヒドン大学の Prof. Banchong Mahaisavariya 学長代理は、大学は AUN-QA の評価テストに合格するため、常に各カリキュラムを改善する必要があるが、これは AUN-QA 規格の採用後に直面する困難の一部に過ぎなかったと述べた。

「AUN-QA 規格を採用する前は、カリキュラムは主に『内容重視』、つまり学生がいかに講義の内容を学ぶかということに主眼を置いていました。しかし、AUN-QA 規格の採用後は、講義を振り返り、学生が学んだことを実生活でいかに実践するのか、ということに大学側が自問する必要があります。これが現在の『結果重視』の教育、実用性を重視のカリキュラムに繋がりました」。

Prof. Banchong は、マヒドン大学を ASEAN とさらに広域エリアにおいても代表的な教育機関にしたいと述べた。

「タイの出生率は急激に低下しているため、大学に通う学生は減ってきています。だからこそ、このような状況においても外国人留学生とタイ人学生の両方を引きつけることができるよう、マヒドン大学はこの地域で頭一つ抜けた大学になる必要があるのです」。

(2019 年 2 月 21 日 Bangkok Post 紙)

■新教員養成課程に向けて大学は準備

教員養成に関する新資格制度はまもなく実施され、全ての教員養成機関は一部から反対意見はあるものの、新しい制度に従うこととなる。

Udom Kachintorn 副教育大臣は「これは王立官報でまもなく公表される予定で、教育機関は新制度を各カリキュラムに適用する必要があります」と述べた。

プラナコーンラチャパット大学 (Phra Nakhon Rajabhat University) の Dr. Direk Pornsima 教育学部長が、今回の制度変更が少なくとも 2 つの法律に反すると主張する書簡を全てのラチャパット大学に送付したことを理解した上で、副教育大臣は上記の発言をした。

「この法律違反は、教職、教員研修生、そして一般の人々の将来の発展を妨げるでしょう」と Dr. Direk は主張している。

Dr. Direk によると、教員養成課程は少なくとも 1 年間の教育実習を含まなければならないと教員人材育成法 (Teachers and Educational Personnel Council Act) に明記されている。しかし、新制度は教員養成課程を 5 年から 4 年に短縮し、1 年間の教育実習を廃止するとされる。その代わり、新制度では学生が 1 年生のときから模擬授業等による訓練を行うことが可能になるとされる。

Dr. Direk は、1 年生と 2 年生は先輩教員が行っている授業をみて学ぶという機会があるが、実際に学生が教える経験を重ねるわけではないため、こういった時間を「教育実習の代わり」としてカウントすることは法律に反すると述べた。「そのため、私は全ての大学経営陣に新制度を注意深く見直し、それが既存の法律に反していないか判断するように促しています」と Dr. Direk は言う。

これに呼応し副教育大臣は、教員養成制度を改定した際、適用される全ての法律および規程を関係当局が考慮に入れていると述べた。

「すでに全ての懸念点について検討済みであり、新しい教員養成制度が法律に反しないことは確かです」と副教育大臣は語った。

一方、ラチャパット大学教育学部長会議 (Rajabhat Education Deans Council) の議長である Dr. Rattakorn Kidkarn は、この新制度への支持を表明した。

「新制度は国際的な慣例に沿ったものであり、タイの法律に反するものではありません」と Dr. Rattakorn は述べ、「5 年目のみ教育実習を受けさせる現行の制度よりも、初年度から授業に慣

れることのできる新制度の方が学生のためにもよいでしょう」と付け加えた。

2004 年から、タイは教員の質向上と教職の権威向上を図り、5年間の教員養成課程を提供してきた。しかし、変化の激しい現代社会に対応するため、期間を 4 年に短縮することが昨年末に決定されている。

(2019 年 2 月 28 日 The Nation 紙)

■タイ政府は日本の衛星モデルを研究

デジタル経済社会省 (Ministry of Digital Economy and Society (MDES)) は、タイ商工会議所 (Thai Chamber of Commerce (TCC)) と共同で日本の衛星モデルを研究し、衛星産業に対する監督方針を模索している。タイでは Thaicom 社の 20 年間の特許権が 2021 年に終了し、その後海外から同産業への投資が可能となる。

MDES の副長官 (Deputy permanent secretary) である Mrs. Vunnaporn Devahastin は、同省が無線周波数を割り当て、放送および電気通信サービスを規制する新しい法律が国王の発令を待つのみである状況に対し、政府は十分な準備を行わなければならないと述べた。

衛星産業の監督のためには他国の状況について調査する必要があり、日本の宇宙戦略室との協議の中で、タイは日本の事例を学ぶことができたと Mrs. Vunnaporn は語った。

日本では、それぞれの衛星が明確に分離されていることを条件に、ベトナム・アラブ首長国連邦・サウジアラビアなどの国々の企業が衛星を飛ばすことが概ね許可されている。

日本の情報・コミュニケーション・科学技術を司る省は担当大臣とともに計画を立て、その計画は関係省庁にとって国の戦略計画に沿った各政策となる。

「タイでは前述の新しい法律が施行された後、MDES と NBTC (National Broadcasting and Telecommunications Commission: 国家放送通信委員会) の権限を明確に区別する必要があります。新法に基づき、衛星に関するライセンスの

申請は NBTC で受理され、一方の MDES がタイの衛星産業の今後の規制緩和に対処する方針を決定するといった具合です」と Mrs. Vunnaporn は述べた。

将来の衛星産業の大きな流れとして、低地球軌道や中地球軌道などの非静止衛星軌道からの情報を基に提供されるサービスへの世界的な投資増加により、小型で一度に何台もの衛星を打ち上げることができるインターネット衛星がさらに多く参入する可能性がある。

インターネット衛星は 5G、IoT、高速データ送信、インターネットを利用した各種調査、位置情報を利用したナビゲーション、高解像度写真など様々なサービスを提供している。

他産業のサービスがさらに衛星に頼らざるを得ない可能性がある状況の中、衛星産業はより多くの企業により激しい競争が予想される。

日本では多くの衛星が低地球軌道型で、一度に何台もの衛星を空に送ることができる。

現在、約 1,000 の衛星が飛んでおり、5 年前はその数が 200 であった。

Space Exploration Technologies (SpaceX) 社の創設者 Elon Musk 氏に与えられた 1 万件の衛星ライセンスもあり、2021 年には低地球軌道衛星の数が飛躍的に増加すると予想される。Elon Musk 氏は電気自動車や大型バッテリー、太陽光発電商品を生産する Tesla 社の CEO でもある。彼の動きが産業内で衛星に対する新たな需要を生み出すと期待されている。

タイでは Thaicom 社の衛星 (Thaicom 4 (Ipstar)、Thaicom 5、Thaicom 6) の特許権が今後終了となる。5G、IoT、人工知能等に対する高い需要に対応することができる Thaicom 社の衛星サービスには今後も大きな期待が寄せられている。

(2019 年 3 月 6 日 The Nation 紙)

■マヒドン大学 協働ワークスペースをオープン

マヒドン大学工学部はそのキャンパス内に若手イノベーターによるテクノロジースタートアップの創出拡大と発展促進を目的とした協働ワークスペース “Innogineer Studio” を開設した。

Jackrit Suthakorn 工学部長は以下のように述べ、この施設が学生や卒業生、一般市民にダイナミックな環境を提供し、市場に新たな製品をもたらす場となることへの期待をにじませた。

「工学部の中心部に位置する総工費 2 千万バーツのこの施設が、イノベーターから起業家への進化を可能にする場を提供するだろう。この施設は実験室、協働スペースその他イノベーターが彼らの最新の製品を展示することができる空間を一通り備えている。そして特筆すべきは、この『ふ卵器』とも呼べる施設がイノベーターのアイデア実現化を助けるようにデザインされていることである。」

開設式典では、工学部電気工学科の Zeng Lertmano 講師より、この “Innogineer Studio” で開発が予定されている “Feukfon” と “Dernadee” というふたつの装置が紹介された。

どちらもまひ患者の運動機動の回復を助ける装置で、“Feukfon” は患者の運動調整技術の向上のために開発された装置、“Dernadee” は高齢者によくみられる歩行困難な痛みを伴う歩行異常である下垂足の患者の歩行補助のために設計された装置である。

同講師によると、最初の実験段階で、日常的な使用の場面で数名の患者が “Feukfon” の画面に表示された動く対象を自分の手で追いかけることが出来るようになった、とのことである。

教育副大臣 Udom Kachintorn 氏は、Innogineer Studio の創立はタイの教育が前進している証しであるとし、以下のように述べた。

「タイは出遅れている。我々はイノベーションを生み出さなかったために 20 年以上中所得国の罫から抜け出せずにいる。大学をはじめとする教育研究機関は、単に「従来型の」労働力とな

るためだけの知識を授けるのではなく、イノベーターになるために必要なスキルを学生に教授して欲しい。新しい世代の学生は彼らの学習スタイルを変化させているため、大学は過去の遺物となる可能性もあり、このような変化に対し教育研究機関は早急に対応しなければならない。」

(2019 年 3 月 19 日 Bangkok Post 紙)

■工学分野を重点化するタマサート大学

タマサート大学工学部 (Thammasat School of Engineering (TSE)) はこの度、「未来に向けた卓越工学センター」 (the Center of Excellence in Engineering for the Future at Thammasat University) を開設した。

Thira Jearsiripongkul 工学部長はこのセンターの主な目的は、体系的に考え、絶えずニーズが変化する工学の世界に適応できる新しい学生を生み出すことであるとし、以下のよう

に述べた。

「我々は実践性を最も重要な要素と位置付けている。そのために、このセンターが学生自身のアイデアを表現したり、彼らが開発した技術を実際に試し、工学スキルをみがく現実社会のシミュレーションの場としての役割を果たすことを期待している。このような機会を与えることで、学生はこれからの彼らを待ち受ける不確実な外部環境の変化に対して準備をすることが出来ると考えている。」

TSE はこのセンターを設立することに加え、TSE 自体が同大学の医学部と共に医療工学分野をけん引する存在となることを目指している。

Thira 工学部長は高齢化社会を迎えつつあるタイにおいて、人々は今後多くの課題に直面することが予想されるが、そのような状況下において医療工学は重要な役割を果たしうるとの認識を示している。

TSE の医療工学のプロジェクトの一つとして現在開発中のものが、アルツハイマーやパーキンソン病の高齢者のための “Tidtam” と呼ばれる装置である。

ブレスレットやアンクレットの形で腕、足、手首に装着するようにデザインされているこの装置は高齢者の家族や介護者のスマートフォンの専用アプリとリンクし、高齢者の所在を確認することを可能にするものである。

万が一高齢者があらかじめ指定されたエリアから外に出てしまうと、この装置から自動的に家族や介護者にアラームが送られる。また、緊急の助けが必要な場合や体調の急変等があった場合には、高齢者自身からアラームを送ることも可能となっている。

(2019 年 3 月 21 日 Bangkok Post 紙)

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535
Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org
facebook: JSPSBangkok



■ 表紙写真紹介



ທາດຫລວງ Pha That Luang (タート・ルアン)

ວຽງຈັນ Vientiane (ヴィエンチャン、ラオス)

ラオスの首都ヴィエンチャンは 12 世紀ごろには存在していたと言われる歴史の古い都市。King Setthathirat(1548-1571)により、16 世紀中ごろに首都に定められた。タート・ルアンはその中心にそびえるラオスを代表する仏塔の一つで同時にラオスの象徴でもある。仏陀の胸骨が収められているとされるが、真偽のほどは不明。

観光客ばかりでなく地元の人々もたくさんお参りにきており、ラオスの人々の心のよりどころであることが見て取れる。

金色の塔が太陽の光で燦然と輝くさまは圧巻であり、メジャーな観光地ではあるが、一見の価値があると感じられた。

■ 編集後記

4 月 1 日より国際協力員として濱端 (東北大学) と共に着任いたしました臼井 (三重大大学) です。1 年間という限られた任期の中で、国際交流に関する幅広い知識と高度な実務能力を身に付けるべく沢山のものを見聞きし、多くの方と交流し、大学職員として、また人としても成長できればと考えています。

今回の特集記事は在タイ日本大使館の久芳全晴一等書記官から、「教育学術分野における日タイ協力の取組と展望」について寄稿いただきました。お忙しい中、貴重なお時間を割いて本稿のためにご執筆いただきましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

(バンコク研究連絡センター 国際協力員 臼井)

JSPS バンコクニュースレター「バンコクの風」

監修：山下邦明 編集長：富山大

編集担当：臼井真希、濱端悠佑